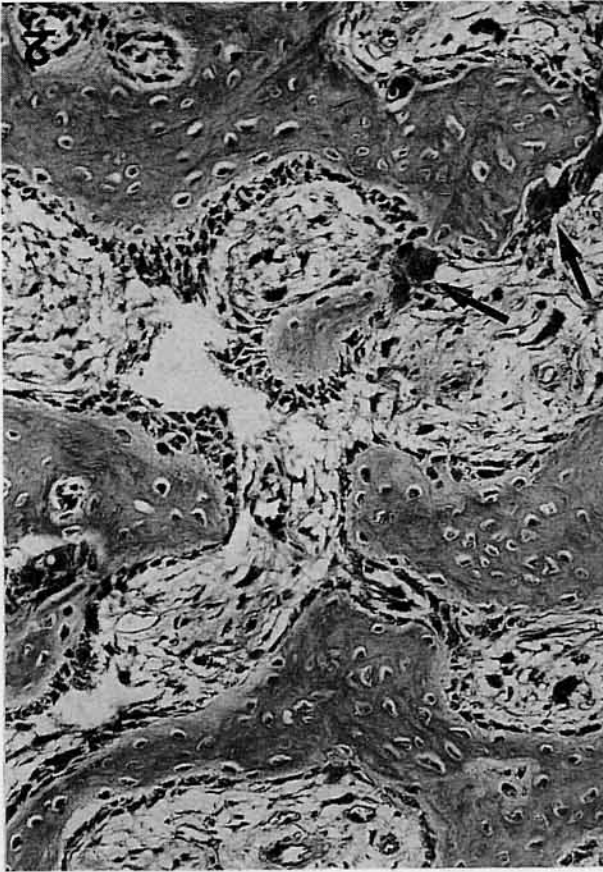


ホロホロチョウの尺骨

北海道大学大学院比較病理学教室出題 第36回獣医病理学研修会標本No.679



動物：ホロホロチョウ (*Humida meleagris*), 雄, 約1歳。

臨床事項：某動物園でホロホロチョウの成鳥ならびに若齢鳥が15羽飼育されていた。これらのなかに、脚骨の肥大を示す鳥が続けて3羽みられた。本例はその1羽であるが、骨の腫瘤状肥大が著名なので、安楽死して病理検索に供した。

剖検所見：概ね左右対称性に、しかも外骨膜性、かつ多発性に骨肥大が著名であった。罹患骨は、脛骨、中足骨、鳥口骨、上腕骨、橈骨、尺骨であった。これらの長管骨夫々において、骨肥大がび慢性かつ均一に生じていることは希で、例えば、左鳥口骨遠位ではピンポン玉大に、左右尺骨では遠位1/2のみが固有骨径の約4倍大に肥大していた。肥大した組織は骨化の著しい硬組織で、固有骨の断面の外周に不均一に生じる傾向を示した。

組織所見：肉眼的に肥大していた部位の組織像はほぼ同一で、外骨膜性異常造骨組織で構成されていた(写真1, HE, 下方が固有正常骨)。この異常組織は未熟な海綿骨で構成され、その骨梁は不整形で、骨梁間隙も広狭さまざまであった。骨梁は大型の骨

小腔・骨細胞に富み、これらの骨梁周囲には1~数層の骨芽細胞があった(写真2, HE, 矢印は破骨細胞)。骨芽細胞層直下には薄い類骨層が認められ、骨梁に接しては活動中の破骨細胞(細胞質に富み、核が大型)がしばしば存在していた。骨梁間隙には、幼若な線維性組織が疎に増殖していた。外骨膜には幼若な線維性組織が増殖し、骨質に接しては骨芽細胞が層を成して増殖し、一部には類骨形成も伴われていた。なお、電顕的検索により、骨芽細胞間に多数のレトロウイルス粒子を認めた。

考察および組織診断：「ホロホロチョウに発生したウイルス性(トリ)骨化石症」と診断した。本症はトリ白血病・肉腫群ウイルス(レトロウイルス)によって鶏に生じるが、ホロホロチョウでの発生は初めてである。鶏の本症の病変は、骨単位で見るとび慢性異常造骨が主であるが、本例では局所性造骨が顕著で、しかも急速な進行性病変を示していることが注目される。本症では、原因ウイルスは骨芽細胞を活発に増殖させ、破骨細胞を障害しないが、これらの事実が病変(骨増殖と骨改築)に示されている。